



## ベニトンボを追って

とよさき いさお  
豊崎 勲 (友の会会員)

私がベニトンボを初めて見たのは、2008年9月20日正午頃、県南の海陽町でのことである。照りつける太陽の光を受け、全身鮮やかな紫紅色に輝くベニトンボの美しさに声も出なかった。すぐにカメラを構えたが、なぜかシャッターが下りず（後日、バッテリー容量不足による不具合と判明）、大慌てとなった。そこで、写真をあきらめ、捕虫網で採集したのである。あの日から、ベニトンボの美しさをなんとか写真に撮りたいと思い、ベニトンボを追って県内を走り回るようになった。

さて、このベニトンボは南方系のトンボの一種で、国外では台湾以南の中国中～南部及び東南アジアに広く分布している。国内では、1954年に鹿児島県薩摩半島南端に近い池田湖で発見されたのが最初の記録である。その後の調査で、ベニトンボは池田湖及び鰻池<sup>うなぎ</sup>周辺だけに生息し、沖縄県や鹿児島県の南西諸島には生息していないことが確認されている。しかし、1980年頃から八重山諸島や沖縄本島でベニトンボが採集されはじめ、台湾以南に生息してい

る個体群が北上しつつあることがわかった。これは、薩摩半島南部に生息しているものよりやや大型である。本種はかなりの速さで北上しつつあり、すでに九州ではすべての県において記録されている。四国では、2001年に高知県西部でオスが採集されたのが最初の記録で、徳島県では2007年に小松島市で確認されている（徳島県立博物館研究報告第19号より）。

私自身はベニトンボを初めて確認してから、2008年内に海陽町のほか、牟岐町、美波町、阿南市、徳島市でも確認している。ただ、オス・メス同時に確認できたのは美波町の池だけであり、その他はすべてオスのみの確認であった。これは、やや小型のトンボであるベニトンボが、成熟オスは紫紅色をしており、翅脈<sup>しみやく</sup>まで紫紅色である（図1）のに比べ、メス（図2）と未成熟オス（図3）は黄金色であり、それほど目立たないところからきているのかもしれない。また、オスは水辺に突き出た枯れ草や棒の先などに止まっていることが多く、目立ちやすい。飛び立ってもすぐ元に戻る。水路などでは、コンクリート上に止まっていることもよくある。これに比べてメスと未成熟オスは、周辺の草むらで見かけることが多く、やはり枯れ草や棒の先に止まることが多い



図1. ベニトンボ♂ (美波町、2010年10月10日撮影)



図2. ベニトンボ♀ (美波町、2009年8月4日撮影)



図3. ベニトンボ未成熟♂(美波町、2010年10月2日撮影)

のだが、体色が周囲に同化するせいか、確認した個体数は少ない。

オス・メスともに確認できた美波町の池では、翌年の発生が期待された。そして予想通り、翌2009年6月11日には未成熟オス1頭、メス2頭を同所で確認した。その後、8月にはたいてい10数頭が見られるようになり、縄張り争いやメスをめぐる争奪戦(図4)にベニトンボの俊敏さと激しい動きを観察することができた。この年も吉野川を越えた板野郡や鳴門市を調査した。香川県東部、淡路島南部にまで足を伸ばしてみたこともあったが、見つけることはできなかった。

2010年も鳴門市へ北上していないかを調査したが、確認できていない。しかし、県南部においては生息地及び個体数は確実に増えており、北上の動きが高まっていることは確かである。いくつもの場所で何度も空中での連結交尾(数秒から10数秒)、オスによる警護飛翔の下、メスが打水産卵するシーン



図5. 警護飛翔産卵の様子(牟岐町、2010年10月19日撮影)



図4. メスの争奪戦(美波町、2010年10月7日撮影)

(図5)を見ることができたからである。なかには、単独打水産卵をしているメスの個体もいた。また、調査を終え自宅(美波町)に帰ったとき、庭でベニトンボオスを見つけたこともあった。このようなことから、やがてはベニトンボも日常的にあちこちで見られるようになるかもしれない。2011年には県南部での定着はもちろん、さらに北上し、分布を拡大していくことも考えられる。ベニトンボは、今頃どこでどうしているのだろう。姿を現す初夏が待ち遠しい。

#### 文献

豊崎勲・山田量崇・大原賢二(2009)徳島県におけるベニトンボの調査記録. 徳島県立博物館研究報告19:39-44.

## 北海道一周ドライブの旅

とくの 徳野 としはる 壽治 (友の会会員)

私は、退職後まずやろうと思っていたことがあります。それは、北海道へ自分の車で行き、ドライブ旅行をするということです。

ドライブは私の趣味の一つで、4月から旅行の検討にかかりました。北海道を一周し、往路は、舞鶴まいづる→小樽おたるの新日本海フェリーを利用し、小樽からは北に向かいます。復路は、函館はこだて→青森せいかんの青函フェリーを利用し、三陸海岸を経て一関で高速道に入り一気に帰ります。6月20日(日)に出発し、7月4日(日)に帰宅する日程としました。宿泊場所は、フェリー、小樽、留萌るもい、稚内わかかない、網走あぼしり、根室ねむろ、白糠しらぬか、

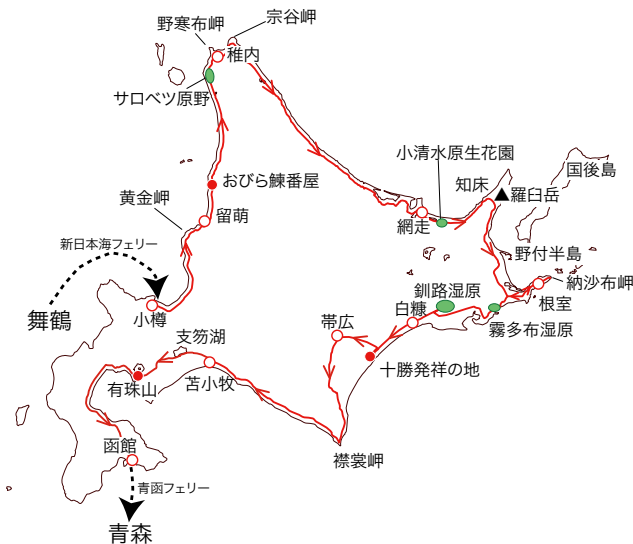


図1. 北海道一周ルート

帯広、<sup>おびひろ</sup> 苫小牧、<sup>とまこまい</sup> 函館、<sup>おおふなと</sup> 青森、大船渡、一関、車中の14泊15日としました(図1)。

車はハイブリッド車(ホンダ・インサイト)なので、どのような燃費が出るか楽しみです。

以下、紙面の都合で青森と岩手は省略し、北海道旅行での感想等を紹介します。

● 留萌市黄金岬(図2)

県内では見られないカンラン石玄武岩柱状節理の海岸で、夕日が大変美しいことで知られています。

● サロベツ原野(図3)

天塩町より道道106号(日本海オロロンライン)に入ります。下サロベツ原野南部の幌延ビジターセンターから木道があり、長沼、パンケ沼付近を散策できます。ここは、学習路にもなっていますのでお勧めです。上サロベツ原野には原生花園があり広大な原野です。近年しだいに乾燥化が進み、笹が侵入し広がってその対策に苦慮しています。



図2. 留萌市黄金岬



図3. サロベツ原野

● <sup>そうや</sup> 宗谷岬

6月24日、9:30、北緯45度31分15秒、気温12°C、曇り、大変寒かった。日本最北端の地に自分で来たということで感無量でした。岬へは、宗谷丘陵に上がってから岬に降りるコースがおすすめです。丘陵はとてつもなく広大、これぞ北海道という感じです。風車がいくつあったかな?

宗谷岬から網走へと、オホーツク海を見ながら延々と走ったのですが、原生花園がいくつもあり、マイカーだと自由に停車できます。

● <sup>しれとこ</sup> 知床(図4)

すばらしい景観です。熊出没のため入山禁止で、知床五湖巡りは残念ながらできなかったのですが、一湖まで大規模な木道ができており散策できました。五湖巡りは、申込制で研修後ガイド付きならば可能です。多くの観光客が踏み荒らして自然破壊が進んでいることから、この状態が良いのかも分かりません。

知床岬からは、<sup>らうすだけ</sup> 羅臼岳が間近に見え迫力満点です。



図4. 羅臼岳





図5. 霧多布湿原

● **野付半島**

根室海峡に突き出た日本最大の砂嘴で、全長26kmもあります。砂嘴に囲まれた野付湾は、広大な湿地になっていて多様な生物が生息しています。また、ここから国後島はわずか16kmの距離です。北方領土返還を求める看板を至るところで見かけました。

● **納沙布岬**

日本最東端の岬で、一番早く日が昇ることから、この岬の灯台は、「日出ずる灯台」と呼ばれています。また、明治5年に北海道で最初に点灯した灯台としても知られています。岬に向かう途中で北方原生花園があり、散策コースも整っています。

● **霧多布湿原 (図5)**

今回は、車道だけからの見学でしたが、散策コースもあるようです。ガイド付きの団体を見かけまし



図6. オコタンペ湖

た。琵琶瀬展望台から一望できます。

● **十勝川河口周辺**

十勝発祥の地の記念碑に遭遇しました。近くには、長節湖や湧洞湖があり、太平洋を眺めながらのキャンプ、原生花園の散策ができます。

● **襟裳岬**

断崖を成し、岩礁が太平洋にぐんと突き出て「これぞ岬だ」という感じです。

● **支笏湖・オコタンペ湖 (図6)**

支笏湖は観光コースになっていますが、お薦めはオコタンペ湖で、支笏湖の北側から入ります。小さな湖ですが大変美しく神秘的な感じがしました。恵庭岳が間近に見え、大迫力です。

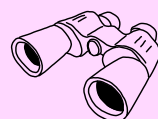
● **有珠山ロープウェイ**

昭和新山、洞爺湖や有珠山を一望できます。ポピュラーな場所ですが、すばらしい眺望です。

【走行データ】自宅→舞鶴 277km、北海道内 小樽→函館 2,139km、青森→三陸→一関 489km、一関→自宅 1,133km、全走行距離 4,038km。満タン法で計測した燃費は 26.96km/ℓ (北海道内は 28km/ℓ は出ています)。

初夏であり北海道内陸部では、30℃を超えている地域が至るところにありましたが、海岸部は常に風が吹き快適でしたので、エアコンは使用していません。帰りの北陸道では雨模様の蒸し暑い天候のため使用しました。

新日本海フェリー(はまなす)は、16,810トン、巡航速度約 55km/h、料金(車両+運転手+2等寝台)25,960円(2割引き)で大変快適です。次回は往復はフェリーで、北海道内陸部を旅する予定です。



**見どころ**

サロベツ原野の湿地は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」、通称「ラムサール条約」の登録湿地です。ガンコウランなどの高山植物が平地でも見られるほか、徳島県では珍しくて絶滅危惧種となっているヤマドリゼンマイやサワギキョウが生育しています。小川誠(博物館学芸員)

## 友の会行事報告

## 釣り大会

◎日 時 2010年10月24日(日)  
13:00～15:30

◎場 所 勝浦川河口

◎担 当 さとうよういち 佐藤陽一 (博物館学芸員)、むかはらたかお 向原敬夫 (博物館普及課)

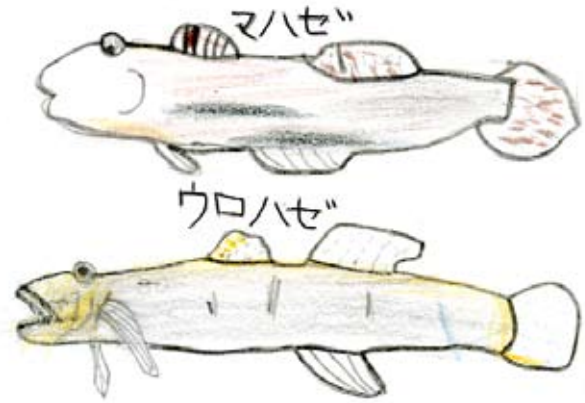
◎参加者 11名

## ◎概要

博物館では毎年恒例の野外自然かんさつ「河口の生きもの」を、徳島市南部で紀伊水道に注ぐ勝浦川の河口干潟<sup>ひがた</sup>で実施しています。この干潟にはシオマネキをはじめ、たくさんの生きものが生息しているからです。今回の釣り大会は同じ場所で開催しました。

実はここは、私がプライベートでもたまに釣りに来る場所でもあります。秋になるとハゼ(マハゼ)の唐揚げや天ぷらが食べたくなり、やってくるというわけです。徳島ではハゼ釣りはあまり盛んではありませんが、私の出身地である東京湾沿岸は、昔からハゼ釣りが盛んな場所です。私も小学生のときから竿を担いでよく釣りに行ったものです。

というわけで、今回の主なねらいはハゼです。一口にハゼと言っても、ここで釣れるハゼにはマハゼの他にウロハゼとチチブがいます。ハゼ以外ではクロダイ(チヌ)やキビレの子ども、シマイサキ、コ



絵：宮田惣太

トヒキ、ヒイラギのほか、食べることはできませんが、クサフグなどがいます。当日は中潮で潮の動きは今ひとつですが、ちょうど干潮から上げ潮に変わる時間帯なので、条件はそれほど悪くはないはず。さて、今回は何が釣れるかな、と期待しつつ皆さんとともに一斉に釣り始めました。

残念ながら今回は魚の食いは今ひとつで、アタリも弱かったです。それでも皆さん何かしら釣ることができ、楽しんでいた様子です。この日釣れた魚は、マハゼにウロハゼ、ヒイラギ、クサフグの4種のみでした。どれも河口域にふつうにいる魚です。ちなみに、ウロハゼはいつでもマハゼより数は出ません。マハゼより大きくなり、色が黒っぽく、見映えがあまりしないので、食べるのを敬遠されそうですが、美味しい魚です。ぜひ食べてみてください。

ところで、今回釣り始めてみて、まず驚いたのが、われわれ担当2名を除いて、子どもから大人まで皆

さん釣りは初めてだったことです。竿とリールのセットに始まり、文字通り一からの手ほどきとなりました。おかげで担当者は自分のおかずを釣る暇もない忙しさでした(あまり釣れなかったのは、けっして担当者の腕が悪いからではありません! たぶん)。それはともかく、またこのような機会を作りたいと思いますので、魚類調査の釣りにもぜひご参加ください。

佐藤陽一(動物担当学芸員)



マハゼをゲット!(左)、クサフグ(毒)を釣って大はしゃぎのお母さん(右)。



**Voic<sup>e</sup> 参加者の声**

● **宮田 惣太・美香**

いろんな魚がつかれると思っていたけどあんまりつかれませんでした。

けど、つりに行けてよかったです。

またあったらしたいです。たのしかったです。ありがとございました。

あっという間に時間がたちました。楽しかったです〜。(母)

● **宮武 優太・由貴子**

ぼくが一番印象に残った事は、ゴカイのキモチわかるさをつれた時にうれしくなった事です。お父さんは、石にひっかかって少ししかつかれなかったようですが・・・楽しくイイけいけんになりました。ありがとございました。

とても楽しかったです。道具も貸して頂いたり、大変お世話になりました。(母)

**熊野古道を訪ねて**

熊野古道を含めた高野山・大峰山・熊野三山など紀伊山地の霊場と参詣道が世界遺産に登録されたことは、記憶に新しいところでしょう。その熊野三山(本宮・速玉[新宮]・那智)への参詣は、院政期に上皇や貴族の間で盛んとなりましたが、鎌倉期になると次第に武士・庶民の参詣も多くなり、「蟻の熊野詣」とも呼ばれるほどになります。

京を出発した上皇や公達たちは、淀川を下り、摂津渡辺津に上がります。渡辺津は海上交通と陸上交通の結節点であり、源義経が屋島に拠る平家を討つため阿波に向かって出帆した場所としても知られています。ここの八軒茶屋に窪津王子がありましたが、ここから紀州田辺を経て熊野本宮に至る道筋、いわゆる中辺路に多くの王子とよばれる小祠が設けられていました。「熊野九十九王子」とよばれるものですが、なかでも藤代・切目・稲葉根・滝尻・発心門の五体王子は、本社の若一王子、禅師宮、聖宮、児宮、子安宮を勧請し、熊野三山の眷属となっていたといわれている重要な場所でした。「先達」と呼ばれる案内役の山伏に率いられながら、沿道の王子に奉幣と経供養をおこないながら熊野本宮をめざしたのです。

熊野本宮の主神は家津御子神で、阿弥陀仏にあてられたことから西方浄土とされました。また、那智社にも観音菩薩がすむ補陀落浄土の信仰が生まれるなど、平安末期に広まる浄土教信仰が熊野の聖地化がすすむ背景でした。

その熊野本宮大社の旧社地である大齋原は、熊野川と音無川が形成する中洲にあり、明治22(1889)

**友の会行事報告**

**紀州一泊研修の旅**

—熊野古道と  
熊楠ゆかりの地を歩く—



- ◎日 時 12月4日(土)～5日(日)
- ◎場 所 和歌山県和歌山市・海南市・田辺市
- ◎担 当 多田精介(友の会役員)、石尾和仁(友の会役員)、辻野泰之(博物館学芸員)、向原敬夫(博物館普及課)

◎参加者 36名

■コース

- ・12月4日(土) 文化の森→紀三井寺(和歌山市)→藤白神社(海南市)→滝尻王子・熊野古道館(熊野古道中辺路)→川湯温泉(田辺市)泊
- ・12月5日(日) 川湯温泉→熊野本宮大社・大齋原(田辺市)→継桜王子・野中の一方杉・野中の清水(中辺路)→近露王子(中辺路)→南紀白浜とれとれ市場(田辺市)→南方熊楠顕彰館(田辺市)→文化の森



熊野本宮大社参道にて

年の大洪水まで社殿があったところで、現在は大鳥居が建てられています。今は国道168号線沿いにあり、129段の石段を登ったところに境内があります。

ところで、中辺路の継桜王子に「野中の一方杉」の巨木群があります。これは、那智の方角、すなわち南の方にだけ枝を伸ばした杉の巨木群ですが、南方熊楠が村長や村民を説き伏せて伐採の危機から守ったものです。今回の研修でも見学場所の1つにしたように、今は観光客の訪れる名所になっています。



熊楠ゆかりの一方杉（左）、大齋原の大鳥居（右）

なお、鎌倉時代に時宗を開いた一遍上人は、熊野に参詣、参籠して以降、熊野神勅を得て「一遍」と名乗るようになりました。それ以来、時宗代々の管長は、その就任にあたって第一に熊野に参詣する習わしがあります。このように、熊野の地域は多くの人々の憧憬と信仰を集めて、脈々と日本の歴史に息づいてきているのです。

石尾 和仁（友の会会員）

継者として邪魔者となり、蘇我赤兄と中大兄皇子の謀略によって謀反の罪に陥られ、19歳の若さで藤白坂で殺される。歌には死の予感に心を痛めながらも無事でありたいと望む有間皇子の心情が伝わってくる。有間皇子に対する同情の念も深かったのか、同集には有間皇子への思いを詠んだ和歌も数首みられる。皇子の無念さを改めて実感した史跡探訪でもあった。

● 岩本 英慈

#### —熊楠の残したもの—

入会して数年、初めて参加した友の会一泊研修旅行のバスは、最後の見学地である南方熊楠顕彰館を目指して北上し、日本で最初にナショナルトラスト運動が起こったと言われている天神崎のある田辺湾に差しかかる。

日本ナショナルトラストの会員になった頃には、天神崎のことをよく聞いていたので懐かしく思った。この地で豊かな自然の残る地を保全しようとする心は熊楠から受け継いだものなのだろうか、ぼんやりと考えていた。目を凝らして見ても晴天のせいでやけに明るい海岸線からは、天神崎はどの辺りか分からず残念だった。

色んな事に興味を持っていたらしい熊楠はどの方面でも的確な指針を今に残しているように思える。そのことが市民を中心とした買い取り、保全運動に繋がっていったのではないかと思う。この運動は一人ではできないので多くの賛同者が必要だが、それには真実とそれを伝える心、そして受け止める心が

## Voic<sup>e</sup> 参加者の声

● 板東 直道

### —藤白神社、有間皇子の墓を訪ねて—

藤白神社に参拝し、社殿裏を流れる柴川を渡り藤白坂を200m程上ると、右側に有間皇子史跡（墓所）があった。隣接して、佐々木信綱博士の刻んだ有間皇子の歌碑「家があれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」があり、歴史に思いをめぐらせ、ひと時を過ごした。

数年前、田中省造先生から毎月1回の万葉集の講義を受け、有間皇子と2首の歌が気になり藤白を訪れてみたいと思っていたので、長年の願がかないとても嬉しかった。

「磐代の浜松が枝を引き結びまさきく有らばまた還りみむ」

皇子は孝徳天皇の息子であり、孝徳天皇が悲しみの中で崩御され、皇極天皇が齐明天皇として重祚され中大兄皇子が皇太子となる。孝徳天皇の息子は後



大事だ。

熊楠を源流とする流れは、時を経て水量を増し豊かな恵みとなり、人々の心を潤していったように思える。心豊かな人たちの住むところは、旅人として接していると大変温かいと感じた。

駐車場から、人通りの少ない住宅を縫うように歴史的町並みが続いており、格子造りや崩れそうな土壁が残っていて、情緒あふれるものだった。熊楠は日々この道を行き来し、熊楠らしい生活をしていたのかなと、ふと思った。

大きなクスが目に入りようやく着いた。市民によって整えられたという顕彰館は、豊かな心によるもう一つの運動としての大きな結晶のようだった。館内で説明を受け、住居を見て、植物も見た後で大クスの下で思いめぐらしている内に時間が過ぎ、この結晶が何を語りかけてくれたのかよく聞き取る余裕がなかったが、次の機会での楽しみとして、心地よく帰途に就くことができた。充実した研修だった。

かんばら やすお ちとせ  
● 神原 康夫・千歳

紀三井寺、中辺路、本宮、南方熊楠顕彰館と一泊二日でたくさん研修させていただき、とても興味深く有意義な旅でした。宿泊先の川湯温泉もユニーク？で料理も美味しく楽しかったです。また近露王子では無茶振り（そばの道の駅・JAコープゆきたい）にも応じていただき、本当に感謝します。熊野の荘厳で清々しいスピリチュアルな雰囲気ではし俗世間を忘れ、車中のビンゴ大会やお土産を買うのに盛りあがったりと硬軟とりまぜで夫婦共々大変満足しております。来年の友の会活動も楽しみにしています。



熊楠顕彰館

いのうえ さとる  
● 井上 暁

紀三井寺は久しぶりでした。門前は昔と違い淋しくなっていた。天候に恵まれ境内からの景色は素晴らしかった。

藤白神社は初めての参拝でした。係の方の配慮により本地仏を拝見できたのがありがたかったです。熊野古道館での地元の方の説明も聞いて世界遺産への取り組みが感じられた。

川湯では同室の方と酒を飲みながら楽しい一夜でした。温泉もよかったですし食事も旨かったです。2日目も好天気で3回目の大社への参拝、早朝で寒さで身がひきしまり旧大社跡も見学でき、ありがたかったです。所々の王子を体験することで熊野説を感じることができた。

南方熊楠氏については名前だけは知っていたが、顕彰館等を見学し、在野にあって膨大な研究資料を残され、人間味ある人柄にびっくりしました。楽しく勉強させていただいた2日間でした。

みずの かずのり  
● 水野 和憲

今をときめく世界文化遺産熊野古道と本宮への企画もよく資料等の準備、途中の説明もあり古代からの歴史の道、藤白神社途中の王子、一番利用された中辺路も近くまで車で入り最高のコースでした。平安時代の旅人の苦勞とどれだけの経費等も現代との差を感じました。次回企画も楽しみにしております。

きのうち きよこ  
● 木内 清子

熊野古道と熊楠ゆかりの地は一度はぜひ行ってみたい所だったので楽しく参加できました。熊野古道はどれほど歩くのか心配だったのですが、私には適当な道のりで、ホテルの温泉もとてもよかったです。

※みなさんからたくさんの感想を寄せていただきましたが、紙面の都合で一部しか掲載できませんでした。ご容赦ください。

**アワーミュージアム 第45号**

2011年2月1日発行：徳島県立博物館友の会  
〒770-8070 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館内  
TEL 088-668-3636 FAX 088-668-7197  
E-mail: mus-fukyu@mt.tokushima-ec.ed.jp